

G 文 化

「G文化」の全般を通して、平成4年9月の学校週5日制の開始に当たって、その制度を生涯教育や社会教育がどう支えるのか強く意識した文献が目立った。

生涯教育(G1)に関しては、全日本社会教育連合会「社会教育」誌が「生涯学習社会における学校週5日制を考える」を特集し、そこで岡本包治は、学校週5日制とは、地域や家庭を学校教員の勤務日数が5日間になるための「受け皿」とすることではなく、青少年の生涯学習を正式に認知することであると主張している。また、青少年教育と生涯教育の関連について、西村美東士「こころ生涯学習—いばりたい人、いりません」は、青少年対策や社会教育の現場で、教育者が「批判的な親の心」の固まりになってしまふ傾向を批判し、従来の教育のように青少年を管理したり保護したりしようとせずに、だれのせいにもできない自由を味わう機会を彼らに提供するよう主張している。

社会教育(G2)に関しては、例年のように、船などを利用した「旅」による教育プログラムや「フロンティア・アドベンチャー事業」に関する各地の実践報告を数多く収録した。そのほか、学校週5日制の実施を契機に、小・中学生の幅広い活動と異年齢集団の交流を図る「地域少年少女サークル活動促進事業」の報告書も数点収録した。子供の遊び場に関しては、国民生活センター調査研究部「子どもの生活環境としての遊び場問題」、東京都生活文化局「東京都の遊び場」等を収録した。これらは、都市居住者としての子供にとっての児童遊園などの重要性とその不備や不足を訴えている。社会教育と学校週5日制の関連については、前出「社会教育」誌が「学校5日制時代の家庭と子ども」を特集し、斎藤哲郎が、9月12日の開始直後に実施した全国規模の調査の結果を紹介している。また、同誌は、「体験学習のすめ」も特集し、菌田頼哉が、社会教育はもっと現実の生活の局面に接近して「体験の学習化」を進めるよう提言している。

青年の家、少年自然の家については、国立オリンピック記念青少年総合センターが、活動内容から施設を探すなどの多様な検索に応じた「全国青少年教育関係施設ガイド」を発行している。国立那須甲子少年自然の家は、学社連携による生活科の研修を先駆的にまとめた「全国生活科担当指導者養成実践研修会実施結果報告書」、自然の家の活動を学習指導要領の各教科の内容と関連づけた「国立那須甲子少年自然の家の活動と学習指導要領(教科)と

の関連」、学校週5日制導入の観点にかんがみて自然の家の効果的な利用形態等を検討した「子供の心を育む研究開発事業実施結果報告書」などを精力的に発行している。国立花山少年自然の家は、紀要で「花山の沿革」を特集するとともに、学校週5日制対応事業として実施した「家族のつどい」の持つボランティア養成の実践の場としての役割などを自己分析している。また、全国青年の家協議会は、「新しい青年教育の展開」では現代の青年像と青年教育や青年の家の在り方について、「青年の家の現状と課題第21集」では学校週5日制時代の青年の家の役割について、それぞれ追求している。そこでは、青年の家が果たしてきた歴史的役割を評価しながらも、強制的、人工的、形式的、画一的などの青年の家運営上の従来の弊害を改革しようとする志向が強く表れている。

指導者（G5）に関しては、田中治彦が、「青少年指導者講習会（IFEL）とその影響に関する総合的研究」を行い、社会教育法の形成などの様々な政策の橋渡しとしてのIFELの歴史的役割を究明しようとしている。また、ボランティア活動については、前出「社会教育」誌が「生涯学習ボランティア」を特集し、松下俱子は、その青少年の活動の意義として、集団の中で自分がどのような立場をとればよいかを自覚して進んで役割を果たす行動が、様々に異なる他者とかかわりを持ちながら生きていくための体験になると主張している。日本青年奉仕協会は、「ボランティア白書1992年版」を発行し、社会奉仕を「もうひとつの教育」としてとらえ、それが共生社会の創造につながるという視点を提示している。

団体活動（G6）に関しては、ガールスカウト日本連盟が「挑戦しつづける運動」を発行し、「世界連盟の基本」を紹介するとともに、今日的課題に対する基本姿勢を明らかにしている。日本青年館は、青年団体活動の実践事例研究を踏まえて行われた「生涯学習時代を担う日本青年館セミナー」の報告書を発行し、那須野隆一は、その基調講演において、従来の承り学習や世代の輪切り学習に対して反省を促している。

国際交流（G7）に関しては、各自治体や民間団体が行う青年海外派遣事業等の報告書を数多く収録した。

（担当 西村美東士）